

## ベートーヴェンのピアノ協奏曲

ベートーヴェンの5曲のピアノ協奏曲は、彼が若きピアニストとしてウィーンに登場してから、シンフォニストとして独自の高みに登りつめるまでの「作曲様式の進化の軌跡」を示している。以下では、作曲順に、各曲の魅力と聴きどころを紹介する。

ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 作品19（作曲：1787～95年頃／初演：1795年）

現在「第1番」「第2番」と呼ばれている協奏曲は、作曲された順番と出版された順番が逆になっている。ピアニストとしてのデビューを飾るため、まず第2番が書かれ（1795年頃）、その後（おそらく、より自信作であった）第1番が書かれた（1798年頃）。ゆえに、この第2番が実質的にベートーヴェンの最初のピアノ協奏曲で、ウィーンでピアニストとして名を上げるために作曲された、若々しい覇気に満ちた作品に仕上がっている。

モーツァルトやハイドンの影響が色濃く感じられる、優雅で古典的なスタイルであるが、随所に見られる力強いアクセント（スフォルツァンド）や、思いがけない転調に、すでにベートーヴェンの個性が強く表れている。

第1楽章：軽快で典雅な雰囲気の中に、ベートーヴェンの情熱的なパッセージがほとばしる。第2楽章（Adagio）：非常に深く、内省的な緩徐楽章。若き日の作品でありながら、のちのベートーヴェンの特徴づける精神的な深さを湛えている。第3楽章（Rondo）：リズムカルでユーモラスなロンド。ピアノがオーケストラと楽しげに戯れるような、遊び心にあふれたフィナーレである。

ピアノ協奏曲 第1番 ハ長調 作品15（作曲：1795～98年頃／初演：1798年頃）

第2番（作品19）の成功を受けて書かれた、よりスケールが大きく堂々とした作品。ハ長調という調性が持つ、明朗で祝祭的な響きを有している。

第2番よりもオーケストラの使い方がシンフォニックになり、ピアノの技巧もさらに華やかになっている。ベートーヴェンが「作曲家兼ピアニスト」として、ウィーンの聴衆にインパクトを与えようとした意気込みが感じられる。

第1楽章：冒頭のオーケストラが奏でる、軍隊風の勇壮な第1主題が印象的。ピアノが華やかな技巧を存分に披露する。第2楽章（Largo）：静謐で深い祈りを思わせる楽章。クラリネットとピアノによる静かな対話は、息をのむような美しさ。第3楽章（Rondo）：快活でスリリングなフィナーレ。ジャズのシンコペーションを思わせるリズムカルな主題が特徴的で、当時の聴衆の熱狂が目に浮かぶ。

ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 作品37（作曲：1800～03年頃／初演：1803年）

本作からベートーヴェンは「傑作の森」と呼ばれる中期スタイルに入る。交響曲第5番《運命》と同じ「ハ短調」という調性を用い、非常に劇的で緊迫感のある協奏曲を生み出した。

それまでの「第1番」「第2番」が「ピアノ独奏付き交響曲」だとしたら、これはピアノとオーケストラが対決する、文字通りの「協奏曲」である。古典派の作風から一歩踏み出し、ロマン派の扉を開いた革新的な作品と言える。

第1楽章：冒頭のオーケストラが提示する、運命の扉を叩くような主題がミステリアスな展開を予感させる。ピアノが登場してからも、両者の葛藤に満ちた対話が続く。第2楽章（Largo）：緊張感あふれるハ短調から一転し、幻想的なホ長調という調性で書かれた、夢の中のような楽章。ピアノの静かなアルペジオが聴く人を別世界へと誘う。第3楽章（Rondo）：短調の緊張感から、最後は輝かしいハ長調へと転換して曲を閉じる。「暗」から「明」へ向かう、ベートーヴェンが得意とした劇的な構成が確立されている。

ピアノ協奏曲 第4番 ト長調 作品58（作曲：1805～06年頃／初演：1807年）

ベートーヴェンの中期を代表する傑作であり、5曲の中で最も革新的で、内面的な深みを持つ作品と評される。

第3番や第5番のような「剛」のイメージとは対照的に、内向的かつリリカルで、詩的な性格を持っている。《皇帝》のような派手さはないが、聴けば聴くほど深い魅力に引き込まれる名曲である。

第1楽章（冒頭）：当時、協奏曲は必ずオーケストラの壮大な序奏で始まるのが常識だったが、ここでベートーヴェンはそうした因習を打ち破り、ピアノの静かな和音の独奏で曲を開始した。つまり、この冒頭部は「音楽史的な事件」であり、本曲最大の聴きどころでもある。第2楽章（Andante con moto）：弦楽器が厳しく無骨な問いかけを放ち、それに対してピアノが優しく、なだめるように応える。この両者の対話が、

次第に厳しさを失い、溶け合っていく流れに思わず引き込まれる。第 3 楽章（Rondo）：第 2 楽章からアタックで奏される、輝かしく躍動的なフィナーレ。静寂からの解放感が聴衆を包み込む。

ピアノ協奏曲 第 5 番 変ホ長調 作品 73 《皇帝》（作曲：1809 年／初演：1811 年）

ベートーヴェンのピアノ協奏曲の頂点に立つ、最も有名で壮大な作品。《皇帝》という通称はベートーヴェン自身が付けたものではないが、まさにその名にふさわしい堂々たる威厳とスケールを誇る。

ナポレオン軍がウィーンを包囲する戦火の中で作曲された。ピアノとオーケストラが一体となって突き進む、まさに「交響的協奏曲」の完成形であり、英雄的な情熱、崇高な美しさ、そして圧倒的なエネルギー感に満ちている。なお、本曲のみ、ベートーヴェンが初演のピアニストを他者に委ねた。

第 1 楽章（冒頭）：第 4 番とは対照的に、オーケストラのトゥッティに導かれて、ピアノが壮麗なカデンツァ風のパッセージを奏でて始まる。この開始だけで、聴く者は一気に作品世界に引き込まれる。第 2 楽章（Adagio un poco mosso）：崇高な祈りにも似た、静かで美しい楽章。変ホ長調から遠いロ長調で書かれており、天国的な響きが醸される。第 2 楽章から第 3 楽章への移行部は、全協奏曲の中でも最大の聴きどころ。第 2 楽章が静かに消えていく中、ピアノが次の第 3 楽章の主題をホルンの響きとともに静かに告げる。そして、クレッシェンドを経て、爆発的なエネルギーで終楽章が開始される瞬間は、鳥肌が立つほど劇的だ。

ルドルフ・ブッフビンダー（ピアノ） ベートーヴェン ピアノ協奏曲 全曲演奏会 I

ベートーヴェン：

ピアノ協奏曲 第 2 番 変ロ長調 op. 19

ピアノ協奏曲 第 4 番 ト長調 op. 58

ピアノ協奏曲 第 3 番 ハ短調 op. 37

ルドルフ・ブッフビンダー（ピアノ） ベートーヴェン ピアノ協奏曲 全曲演奏会 II

ベートーヴェン：

ピアノ協奏曲 第 1 番 ハ長調 op. 15

ピアノ協奏曲 第 5 番 変ホ長調 op. 73 《皇帝》